



ServerView Suite ServerView Deployment Manager 補足情報

■ はじめに

本書は、ServerView Deployment Manager V5.50, V6.00, V6.00 SP1, V6.10, V6.20, V6.30 に関連する以下のマニュアルの補足情報です。本書をお読みになる前に、必ず以下のマニュアルもご覧ください。

- ・ ServerView Deployment Manager (sv-deployment-mgr-jp.pdf)

以下の文書に、本書に記載されていない制限、留意事項が記載されております。併せてご覧ください。

- ・ Release Notes (ReadMe_jp.htm)

(SVS DVD を使用する場合は、¥SVSSoftware¥Software¥Deployment¥DeploymentManager¥フォルダに配置されています。ダウンロードファイルを使用する場合は、展開して作成されるフォルダに配置されています。)

■ 対象バージョン

本書は、以下のバージョンの ServerView Deployment Manager(以下 SVDM)を対象にしています。

本書の対象バージョン : V5.50, V6.00, V6.00 SP1, V6.10, V6.20, V6.30

■ 補足情報

1 システム要件

1.1 サポート機種

ServerView Deployment Manager V6.20, V6.30 は、以下のモデルをサポートしております。(2012 年 11 月時点)

- TX100 S2 / TX100 S3 / TX120 S3 / TX140 S1 / TX150 S7 / TX150 S8 / TX200 S6 / TX200 S7 / TX300S6 / TX300 S7
- RX100 S6 / RX100 S7 / RX200 S6 / RX200 S7 / RX300 S6 / RX300 S7 / RX350 S7 / RX500 S7 / RX600 S5 / RX600 S6
- BX920 S2 / BX920 S3 / BX922 S2 / BX924 S2 / BX924 S3 / BX960 S1 / BX620 S6

ServerView Deployment Manager V6.10 は、以下のモデルをサポートしております。(2012 年 5 月時点)

- TX100 S2 / TX100 S3 / TX120 S3 / TX140 S1 / TX150 S7 / TX200 S6 / TX300S6 / TX300 S7
- RX100 S6 / RX100 S7 / RX200 S6 / RX200 S7 / RX300 S6 / RX300 S7 / RX350 S7 / RX600 S5 / RX600 S6
- BX922 S2 / BX920 S2 / BX924 S2 / BX924 S3 / BX960 S1 / BX620 S6

ServerView Deployment Manager V6.00, V6.00 SP1 は、以下のモデルをサポートしております。

(2012 年 3 月時点)

- TX100 S2 / TX100 S3 / TX120 S3 / TX140 S1 / TX150 S7 / TX200 S6 / TX300S6 / TX300 S7
- RX100 S6 / RX100 S7 / RX200 S6 / RX200 S7 / RX300 S6 / RX300 S7 / RX350 S7 / RX600 S5 / RX600 S6
- BX922 S2 / BX920 S2 / BX924 S2 / BX960 S1 / BX620 S6

ServerView Deployment Manager V5.50 は、以下のモデルをサポートしております。(2011 年 7 月時点)

- TX100 S2 / TX100 S3 / TX120 S3 / TX140 S1 / TX150 S7 / TX200 S6 / TX300S6
- RX100 S6 / RX100 S7 / RX200 S6 / RX300 S6 / RX600 S5 / RX600 S6
- BX922 S2 / BX920 S2 / BX924 S2 / BX960 S1 / BX620 S6

1.2 サポート OS

ServerView Deployment Manager のサポート OS は、製品マニュアルを参照してください。

1.3 ライセンスおよび製品サポートについて

Deployment Manager をご使用になるにはライセンス購入が必要です。リモート OS セットアップ、クローンセットアップを行いたいターゲットサーバ数(クライアント数)のライセンスを用意してください。デプロイメントサーバ自身には、ライセンス購入は必要ありません。

・ライセンスは有償です。1 ターゲットサーバ毎に 1 ライセンスが必要です。

・ServerView Deployment Manager では有償サポートメニューをご用意しています。万が一のトラブル対応等につきましては、SupportDesk 契約が必要となります。ライセンス購入されても、本製品に対するサポート契約を締結されていない場合は、QA 対応やトラブル対応を実施することができません(有償サポート契約がある場合のみ対応可能)。本製品はその性格上、システム構築時より利用するケースが多いため、システム構築時よりサポート契約を締結頂くことを推奨いたします。

2 動作、運用について

2.1 DOS デプロイメントのサポート終了

DOS デプロイメント機能は、V5.50 以降ではご利用になれません。Windows PE デプロイメント機能(WinPE MDP)をご利用ください。

2.2 JobAPI のサポート終了

JobAPI 機能は、V6.00 以降ではご利用になれません。

2.3 マルチパス環境における動作をサポートしていません。

本ソフトウェアは、マルチパス構成が設定済みの環境に対するバックアップ、リストアなどの一切の動作

をサポートしておりません。マルチパス構成が設定済みの構成に対するクローニング、リモートインストール、クラッシュ リカバリは行わないでください。

本ソフトウェアがターゲットサーバの起動に使用する Windows PE は、マルチパス構成が設定されているシステムであることを認識できないため、マルチパス構成が設定された 2 つのディスクドライブを同時に認識した場合、システムドライブの一意性を確保する為に、マルチパス構成の片方のディスクドライブ内の ID 情報を更新します。

その結果、既にインストールされているシステムが起動しなくなってしまう可能性があります。

マルチパス接続環境に対してバックアップ、リストアなどの本ソフトウェアの機能を使用する場合、事前に FC パス、iSCSI Boot パスを切断してください。FC パス切断の詳細な手順につきましては、SAN Boot 構築ガイドを参照してください。

2.4 トラブル時のログ収集

サポート契約されたお客様で、製品をご使用中のトラブルについて調査を依頼される場合、製品に標準添付されているログ収集ツールでログを採取した上でお問い合わせをお願いします。なお、ログ収集ツールは、ご使用になっているバージョンのインストールパッケージに格納されている版数を使用してください。

- ・(製品インストールパッケージのルートフォルダ)¥diag¥GetRdDiag.vbs 、または
- ・(Deployment Manager インストール先)¥diag¥GetRdDiag.vbs (※V5.40 以降のみ)

2.5 "512 バイト エミュレーション ディスク"をご使用の環境についての留意事項

"512 バイト エミュレーション ディスク(512e)(*1)"を搭載した装置では、クローンイメージ/スナップショットイメージの作成時に、後述の条件下で特定のオプションを使用する必要があります。また、既に条件に一致する環境で、特定のオプションを使用しない状態でイメージの作成を行った場合は、再度イメージを作成し直して頂くようお願いします。

条件:

クローンイメージ/スナップショットイメージの作成対象のターゲットサーバが、Red Hat Enterprise Linux 6で動作している場合、かつ、ファイルシステム種別が EXT2またはEXT3 である(*2) 場合。

指定すべきオプション:

「クローンイメージの作成」または「スナップショットイメージの作成」ウィザードの「ディスク」ステップ (*3)において、以下のいずれかのオプションを選択してください。

- ・「RAW モード」または「ファイルシステム 非依存モード」を選択する。
- ・「ファイルシステム 依存モード」を選択した場合、「高速イメージ作成」を指定する。

発生事象:

デフォルトの状態のオプション(「ファイルシステム 依存モード」を選択し、「高速イメージ作成」を選択しない)を使用してクローンイメージ/スナップショットイメージの作成を行った場合、そのイメージをリストアした際に、以下のいずれかの現象が発生します。

- 「0001 システム内部の異常です」のメッセージが表示されてリストアに失敗します。
- リストア処理の転送速度が「数MB/分」に著しく低下、実用的な転送速度で処理できません。

512e ディスクに Red Hat Enterprise Linux 6 をインストールした場合、EXT2、EXT3 ファイルシステムのオプションに "RAID stride" が追加されてフォーマットされます。このオプションが付加された環境で上記障害が発生します。このオプションは以下の手順で確認できます。

Red Hat Enterprise Linux 6 において、root 権限で以下のコマンドを実行します。

```
# dumpe2fs <デバイス名> (例: # dumpe2fs /dev/sda1)
```

パーティションの情報が表示されます。

この中で、以下の情報ラベルが出力される場合は、"RAID stride" が設定されています。

RAID stride:

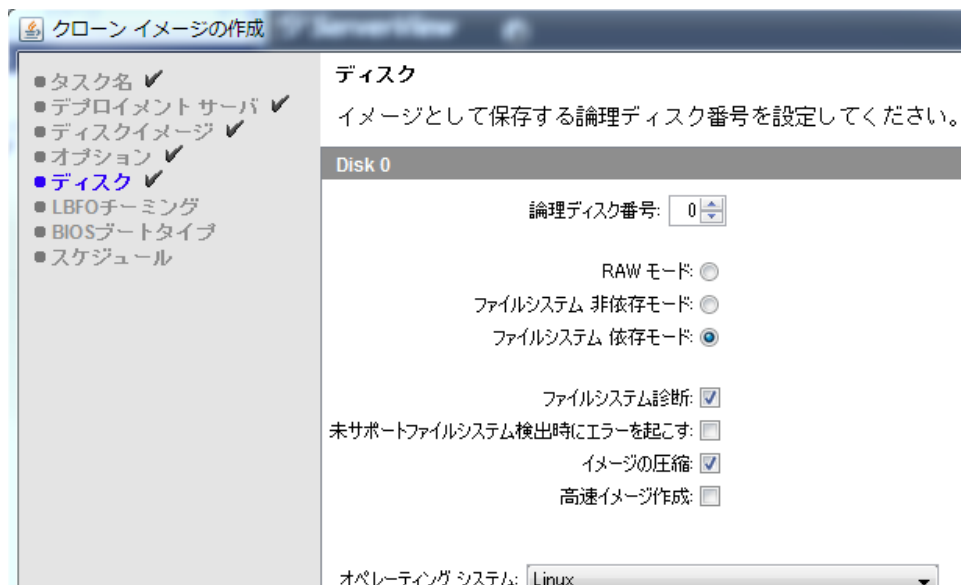
注釈:

*1: 512 バイト エミュレーション ディスクとは:

従来のハードディスクドライブは 512 バイトのセクターを基本アクセス単位としていました。近年、ディスクの大容量化に伴い、4096 バイト(4KB)のセクターサイズを基本アクセス単位としてディスクが登場しています。この時、従来のシステムとの互換性を保つ為、512 バイト単位の動作をエミュレーションするディスクです。

*2: EXT4 の場合、本問題は発生しません。

*3: 以下のようなウィザードのオプション選択画面です (画面例は「クローンイメージの作成」)。



以上